

画面の向こう

沖縄県立開邦中学校三年 比嘉 千咲

遠い国の知らない街で、瓦礫の前に立ち尽くす子供の姿。黒煙に覆われた空。あまりに凄惨なその状況をテレビが映すたび、私はそれを見るのが苦しくなる。

だから私は、リモコンのボタンを押す。プツツと音がして画面が暗くなれば、その瞬間、私の世界から悲劇は消える。アナウンサーの訴えも、あの子の絶望も、全てなかったことにできる。見て見ぬ振りをきめこんで、その事実を拒絶する。

最近よく聞くガソリン代の高騰も、私はただ、少し自分の生活が不便になるだけの話だと思っていた。けれど、その価格の変動を辿っていくと、結局はどこかの国での争いや、誰かの悲しみに行き着く。

母が「高い」と言って眉をひそめて払うそのお金が、巡り巡って、誰かを傷つけるための道具に姿を変えているのかもしれない。そう考えると、ゾツとした。私達はただ買い物をしているだけなのに、知らないうちに争いの渦に巻き込まれている。世界は、私達が思うよりもずっと残酷に、地続きで繋がっているのだ。

それなのに、私はテレビを消すことで、その繋がりを自分勝手に切り捨ててきた。それは、自分自身の平穏を守るために、他者の存在を世界から強引に消し去る「拒絶」そのものだ。

さっきまで画面の中にあった現実を、ボタン一つで「なかったこと」にする。この無関心こそが、平和を内側から壊していく目に見えない加担ではないだろうか。私がニュースを消して沈黙すること

は、争いを続ける人達に、「どうぞ続けてください」と許可を与えているのと同じなのではないか。そんな態度の積み重ねが、争いの絶えない土壌を作っている気がして、怖くなった。

そもそも平和とは、単に戦争がない状態だけを指すのではないはずだ。それは、遠い国で暮らす誰かを、自分と同じように体温を持った人間として、誰もが当たり前に認め合っている状態のことではないだろうか。

だからこそ、目を逸らしたくなるようなニュースを、ちゃんと見つめ続けること。その「想像すること」をやめない姿勢こそが、平和という危うい状態を支えるための、一番大切な土台になるのだと思う。

もし私が逆の場所に生まれていたら。逃げ場のない瓦礫の中で、どこかの誰かがリモコン一つで自分の存在を消していると知ったら、どれほどの絶望を感じるだろうか。そう想像すると、自分の勝手な都合で世界をシャットアウトすることがどれだけ冷たいことか気づかされる。私達が当たり前前に過ごしている安全な暮らしは、決して当然の権利ではなく、世界の絶妙なバランスの上に成り立った幸運に過ぎないのだ。

平和への第一歩は、指先一つの「拒絶」をやめることから始まる。無関心という壁を作らずに、現実を受けとめ、考え続ける。それこそが、私にできる精一杯だ。

次にあのニュースが流れた時、私はもう逃げたりしない。画面を消して逃げるのではなく、その痛みを心に刻んでおきたい。どれだけ苦しくても、相手のことを想像し続ける。それが、この地続きの世界を生きる人間の、当たり前前の責任なのだと思う。